

平成四年八月三日宣告 裁判所書記官 久保

久保

平成四年(初)第六〇号、第八六号

判 決

本籍 金沢市東力二丁目二八番地二

住居 同所同番地 犀畔荘一号室

自動車運転手

廣 野 秀 樹

昭和三九年十一月二六日生

右の者に対する傷害、準強姦被告事件について、当裁判所は、檢察官江村正之出席の上審理し、次のとおり判決する。

主 文

被告人を懲役四年に処する。

未決勾留日数中六〇日を右刑に算入する。

理 由

（罪となるべき事実）

被告人は、金沢市内の運送会社に自動車運転手として勤務していた者で、かねて右会社の事務員安藤文（昭和四五年八月一五日生）に好意を抱いて交際を求めているが、同女から断られていたので、その真意を確認したいと考えていたところ、

第一 平成四年四月一日、同女と話し合ったものの交際を拒否されたことなどから立腹し、同日午後七時二〇分ころから同日午後七時五〇分ころまでの間、自己所有の軽四輪自動車の助手席に同女を乗せて、金沢市松村一丁目三七五番地付近から同市大野町四丁目二番一号所在の運輸省第一港湾建設局金沢港工事事務

所の北西約九二・六メートルの海岸沿い道路に至るまでの間、右松村一丁目三七五番地付近道路を走行中の車内で左手甲で同女の顔面を数回殴打し、右海岸沿い道路に停車中の車内で、手拳で同女の顔面を数回殴打し、さらに、右工事事務所北西約一一四メートルの地点まで同車を移動させた上、同所に停止中の車内でカセットテープのケースを割ってその破片を同女の顔面に押し付けたり、平手で同女の顔面を数回殴打し、続いて同女が車外へ逃げ出そうとして助手席ドアを開けて車道脇の歩道上に上半身を乗り出すや、右歩道上において、右足で同女の左顔面を一回蹴り付けてその右側頭部をアスファルト舗装された路面に打ち付けさせるなどの暴行を加え、よって、同女に全治期間不明の頭蓋骨骨折、下顎骨骨折、右急性硬膜下血腫等の傷害を負わせ、

第二 同女が右傷害により意識もうろうの状態となり抗拒不能であるのに乗じて、

同女を姦淫しようとして企て、同日午後八時五十分ころ、同市普正寺町九番地犀川左岸横空き地に至り、同所に停止した前記自動車内において、その下半身を裸にした上、抗拒不能の状態にある同女を姦淫し

たものである。

（証拠の標目）

括弧内の記号番号は、検察官請求証拠の標目番号である。

判示事実全部について

一 被告人の当公判廷における供述

一 被告人の検察官（乙12）及び司法警察員（乙7、8及び11）に対する各供述調

書

一 医師黒田英一作成の診断書二通（甲5、6）及び同人の司法警察員に対する供

述調書（甲 7）

一 司法警察員作成の実況見分調書（甲 14）

一 司法警察員作成の捜査報告書二通（甲 1 及び 4）

一 司法警察員作成の写真撮影報告書（甲 2）

判示冒頭の実事について

一 被告人の司法警察員に対する供述調書二通（乙 4、5）

一 松平日出男（二通、甲 32、33）、梅野博之（甲 34）、池田宏美（甲 35）、安田敏（甲 36）及び北野奈美（甲 40）の司法警察員に対する各供述調書

一 金沢市長認証の戸籍謄本（甲 26）

判示第一の実事について

一 被告人の司法警察員に対する供述調書（乙 6）

一 司法警察員作成の実況見分調書（甲10）

一 司法警察員作成の写真撮影報告書（甲9）

一 司法警察員作成の捜査報告書三通（甲8、11及び43）

判示第二の事実について

一 被告人の司法警察員に対する供述調書（乙9）

一 司法警察員作成の実況見分調書（甲13）

一 金沢西警察署長作成の鑑定囑託書四通（甲16、19、22及び24）及び石川県警察本部刑事部鑑識課科学捜査研究室技術吏員作成の鑑定書四通（甲17、20、23及び25）

（法令の適用）

被告人の判示第一の所為は包括して刑法二〇四条に、判示第二の所為は同法一七

八条、一七七条前段にそれぞれ該当するところ、判示第一の罪について所定刑中懲役刑を選択し、以上は同法四五条前段の併合罪であるから、同法四七条本文、一〇条により重い判示第二の罪の刑に同法一四条の制限内で法定の加重をし、その刑期の範囲内で被告人を懲役四年に処し、同法二一条を適用して未決勾留日数中六〇日を右刑に算入し、訴訟費用については刑訴法一八一条一項ただし書を適用して被告人に負担させないこととする。

(量刑の理由)

被告人は、判示被害者安藤文に好意を抱いて執拗に交際を求めた上、同女が自己の意に適った返事をしなかったことに立腹し、特段の落ち度もなく無抵抗な同女に対して、判示のとおり、一方的に多数回にわたり顔面を殴打したり、車外に逃げ出そうとした同女の顔面を足蹴にしてその側頭部を路面に打ち付けさせるなどの過激

な暴行を加えた上、右暴行により判示のような重篤な傷害を負って抗拒不能の状態にあった同女を姦淫したものである。そして、同女は、被告人の右暴行により、しばらくは意識不明の状態にあって、いわゆる植物人間になることを危惧されたもので、幸い現在においては意識を回復したものの、なお寝たきりで、手足は麻痺し、会話もできず、目もよく見えず、今後更に手術やリハビリテーションを行って症状の改善を図らなければならず、その回復の程度及び時期について見込みの立たない状態にある。

このように、被告人が本件犯行によって年若い未婚女性である被害者安藤文に与えた肉体的、精神的打撃は甚大であり、同女の親族の被告人に対する被害感情も極めて厳しく、被告人の母親の面会の申し入れも拒絶している状況にある。

そうすると、被告人の刑事責任は重大であり、被告人が本件犯行後警察署に出頭

して本件犯行を自首し、救急車の出動を要請していること、被告人が自己の行為を反省する供述をしていること及び被告人には前科がないことなどの情状を考慮しても、なお主文掲記の量刑をもって臨むのが相当である。

以上の理由により、主文のとおり判決する。

平成四年八月三日

金沢地方裁判所第三部

裁判長裁判官

裁判官

三宅俊一郎
川口泰司

裁判官

山

田

徹

